

あかしじょうぶけやしき
兵庫・明石城武家屋敷跡

- 1 所在地 兵庫県明石市東仲ノ町
- 2 調査期間 一九九九年(平11) 四月～八月
- 3 発掘機関 明石市教育委員会
- 4 調査担当者 渡辺 昇・高木芳史(兵庫県教育委員会)
- 5 遺跡の種類 城下町跡
- 6 遺跡の年代 近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(明石・須磨)

明石城は小笠原忠政(忠真)が明石藩主として転封されたことに伴って、元和三年(一六一七)から構築された。それに伴って地形の低い南側一帯に城下町が整備された。今回調査したのは南石東部分の東中ノ丁(文久絵図による)に相当する地域で、平成八年度から継続して調査している。比較的調査面積が広く、道部分の調査が実施できたことから、江戸時代の屋敷割り

がある程度明らかになった。屋敷溝や門の検出から、文久年間の絵図との比較もでき、出土遺物の中に焼き継ぎ時の文字が残っていることから、屋敷名やその広さ、位置が確定できるようになった。文字資料が出土した遺構は、(1)～(2)は松本家に当たり、(1)(2)は屋敷地南側の池から出土している。池は近代になって廃棄場所となったようで、その中から出土している。(3)は市川家に位置する地点で、北側部分の落ち込みから出土している。

また、三好家に相当する屋敷中央の井戸から、「中末」の焼印の押された円形容器の蓋が出土している。四枚の材からなり、接合は木釘によっている。中央やや右側に焼印が施されている。厚いことから通常の曲物の蓋ではないと思われる。(3)に近接する溝から、焼印で記号が押された、栓か工具の歯と思われるものが出土している。歯部分は断面円形であるが頭部は断面方形である。同地点から数本の同形の遺物が出土しているが、他には焼印は存在しない。

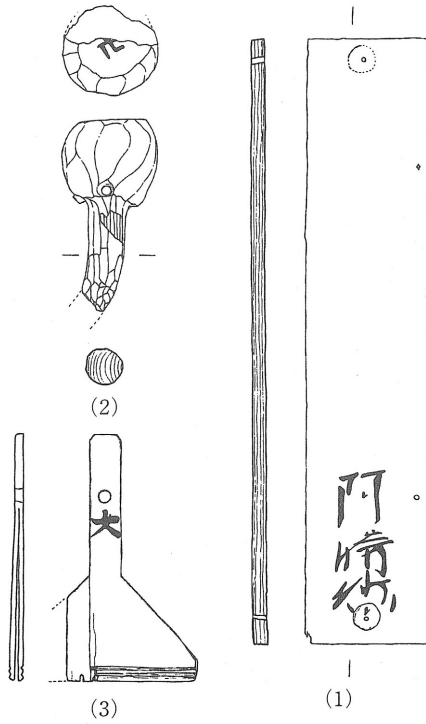
8 木簡の积文・内容

池跡(松本家)

(1) 「。阿□□。」 360×72×8 011

(2) 卍 径57×長(114) 061

落ち込み(中川家)



(3) 「○大」

146×(78)×5 061

(1)は完存に近い板材で上下に留めた孔が認められる。右側側部にも穴が二カ所存在する。(2)は栓の頭部に卍の記号が墨書されている。頭部が大きく断面は円形である。(3)は刷毛本体で、ハケ部は残存していない。柄中央に円孔があり、その下に墨書で記されている。刷毛は縦方向に割って挟み込むものである。

9 関係文献

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『平成一一年度年報』(二〇〇〇年)

明石市教育委員会 『平成一一年度文化財年報』(二〇〇一年)

(渡辺 昇〈兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所〉)